

## 令和4年度第1回女川町総合教育会議会議録

1 招集月日	令和4年9月16日（金）午前9時30分
2 招集場所	女川町役場庁舎 3階 小会議室
3 出席者	須田 善明 町長 平塚 隆 教育長 横井 一彦 教育委員 新福 悅郎 教育委員 中村 たみ子 教育委員 山内 哲哉 教育委員
4 欠席者	なし
5 事務局	阿部 恵 教育局長 千葉 一志 教育局次長 千葉 英貴 教育局次長 田中 浩司 教育局次長兼指導主事 吉田 友香 教育局次長兼社会教育主事 中嶋 憲治 教育局次長 我妻 裕美 教育局主幹兼学務係長 高橋 秀幸 教育局総務係長 後藤 雄喜 教育局体育振興係長
6 傍聴	0名
7 開会	午前9時32分 ただ今から、令和4年度第1回女川町総合教育会議を開催いたします。 なお、会議は原則公開としております。 また、会議録作成のため録音させていただきますので、予めご了承願います。 本日の次第の4番「報告事項」までは、事務局において進行させていただきます。よろしくお願ひいたします。 では、はじめに、開会に当たりまして、本会議を開催いたします女川町長須田善明からご挨拶を申し上げます。
8 町長挨拶	町長 おはようございます。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。 今年度第1回の総合教育会議ということでございます。 今回は、記念すべき今年度1回目にして、平塚教育長の初めての総合教育会議ということでございまして、教育委員会はこれまでずっとやられていると思うのですが、どういう感じだったのかと、村上さん時代とは何か変わったのかみたいなものを

この空気感の中からくみ取っていきたいというふうに思うところでございますが、全員こういう形で顔を合わせるのは初回ということでございますので、私たちも楽しみにしていたところでございます。

平素から様々に皆様にはお力添えをいただきおりました。

第7波と言われてずっときましたが、町内でも、感染状況、特に小・中学校あるいは保育所で、広がりというのでしょうか、感染の数も増えてということでご心配はあったかもしれません。現場ではいろいろ工夫いただきながら、継続させられるものは何とか継続というのでしょうか、その継続させるものというのは、本来いつもある姿のことだと思います。子供たちにとっては当たり前の日常というものを、どう継続させていくかということに腐心をこれまでもしてきていただいたかというふうに思っております。

何となくまた違う局面にこれから入っていくのかなというふうなところが見えてきているわけでございますが、みんな日々一日一日、経験と生きる時間を重ねて、来年また卒業してというふうに、どんどんずっとここで育っていく子供たちの成長というのは、社会情勢が変わっても止まることはないわけでございまして、皆様方にまた様々にご指導いただきながら、町当局としても、教育委員会と一緒に子供たちの育みということと、あとは社会教育の進展ということを、子供から年配までがこの地域の中で様々に学びながら、活躍、活動できる環境づくりということをしっかりと努めてまいりたいと思います。

今日、議事としては、これは教育長からお話ありまして、部活動の地域移行についてということが一つの主題ということになってまいります。結構大事、結構というか、これからだからこそ大きいテーマかなというふうに思っています。

こういったところも皆様方にいろいろご意見賜りながら、今後の指針に反映させていくように、これも連携しながら努めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

以上、開会に当たりましてご挨拶させていただきました。

このあとの時間どうぞよろしくお願ひいたします。

ありがとうございました。

続きまして、教育委員会を代表いたしまして、平塚隆教育長よりご挨拶をお願いいたします。

## 9 教育長挨拶

教育長

改めまして、皆様、おはようございます。

町長からご挨拶いただいたあとで私と、非常に恐縮でございますが、一言お話をさせていただければと思います。

暑い暑いと思っていましたら、いつの間にか季節は夏から秋へと吸収されて、本当に朝晩の涼しさに秋が深まりつつあるなというふうに感じています。

小・中学校におきましては、今が実は宿泊体験等の学習が花盛りであります、今週、中学校第3学年の修学旅行をはじめ、松島の野外活動センターや花山への合宿等、ぜひ実のある体験になればと願っているところであります。

本日はご多忙の中の中、須田町長をはじめ、教育委員の皆様にご臨席をいただきまして、令和4年度の第1回女川町総合教育会議を開催できますことに心から感謝を申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。

この総合教育会議は、皆様ご存じのとおり、2015年に法律が改正されまして、教育委員会の見直しが図られ、その中の一つとして義務付けられたものでございます。

これまでにも年に2回、必要な場合は3回開催して貴重なご意見をたくさんいただいたと。そして教育行政に活かしてきたという話を伺っておりました。

本日の会議につきましては、先程町長からも話があったのですが、私自身がこの4月に就任したばかりということもありまして、これまでの施策等の取組を踏まえまして、本年度、特に学校教育における重点施策と申しますか、学校と教育局総力を挙げて頑張りたいと。さらには、今話題の休日の部活動の地域移行の2点について、皆様から様々なご意見を頂戴いたしました議事として取り上げさせていただきました。

特に休日の部活動の地域移行については、あとで私なりの考えも述べさせていただきたいと思っているのですが、中学校教育においては本当に大きな改革かなというふうに捉えています。慎重かつ大胆に進めていかなければいけないと思っているところで、本当に皆様におかれましては忌憚のないご意見をたくさん賜りますようお願い申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

## 10 報告事項

教育局長

ありがとうございました。

それでは、早速、次第4番「報告事項」に入らせていただきます。

女川町立女川小・中学校の現況について、平塚教育長からお願  
いいたします。

教育長 それでは、大変恐縮でございますが、着座にて報告をさせて  
いただきたいと思います。

皆様に配布しております資料は、「総合教育会議」資料と「別  
添資料」の2部となります。「別添資料」につきましては、後  
ほど議事の中で説明させていただくものであります。

まず、「総合教育会議」の資料に沿ってお話をさせていただき  
ます。

女川小・中学校の現況ということで、おととし、令和2年8月  
23日に開校式典を実施してから2年が過ぎました。その間、先  
程町長からも話があったのですが、新型コロナウイルス感染拡  
大の大波小波を乗り越えながら、ここまで頑張ってもらっている  
なと感じています。

本年度におきましても、4月から5ヶ月余り、校長、教頭のリ  
ーダーシップのもと、目の前の子供たちと真摯に向き合って教  
育活動が展開されていると感じています。

はじめに、女川小学校関係についてお話をさせていただきます。  
資料を見ていただければと思うのですが、児童数につきまして  
は、表のとおりでありますが、5月2日付けで、万石浦小学校  
から第6学年の女子児童が1名転入してきまして、年度当初よ  
り1名増の213名となっています。

2ページ目お開き願います。

教職員につきましては、総勢32名体制で頑張ってもらっています。  
町からは、補助教員3名をはじめ、6名配置していただきおりま  
して、本当に大変ありがたく思っているところでござります。

不登校児童については、昨年度は第1学年の児童が1名該当し  
ましたが、本年度については、まだ5ヶ月余りということです  
ので該当者はいませんが、不登校傾向児童として、2名の児童  
を挙げています。第2学年と第6学年ですが、学級担任あるいは  
は学校を挙げて、家庭との連絡を取りながら頑張っている状況  
かと、そのように認識しています。

いじめについてです。

学校としていじめ件数ゼロを目指すのではなくて、いじめは絶  
対許さないというスタンスで、道徳の授業をはじめ、すべての  
教育活動の中で取り組んでもらっています。経年変化を見ま  
しても、少なくなっているという印象ですが、いじめが潜伏化し

ないよう、これまで実施してきました定期的な意識調査の実施等、あるいは普段の健康観察等をしっかりと行いながら、今後も未然防止等に努めるよう話していくみたいと思っているところであります。

いじめの内容につきましては、悪口やからかい等の軽微なものであって、いわゆる重大事案に発展するようないじめは報告されていません。

3ページお開き願います。

学力面についてです。

本年度の全国学力・学習状況調査の学力調査の結果については、すでに教育委員の皆様、そして町長にもご報告のとおりなのですが、昨年度の結果、さらには、昨年の12月に実施した標準学力検査の結果についても併せて掲載させていただきました。皆様ご存じのとおり、テストで子供たちの学力のすべてを測れるものではないということは十分承知しつつ、先日も申し上げましたとおり、今後の課題としては、国語はさらに伸ばして、算数、理科については、学習内容をいかに子供たちに学力として定着させていくかが鍵かなと思っているところであります。この部分については、後ほどの中学校でも話をさせていただければと思っています。

続いて、読書活動の推進について。

昨年度の総計、貸出冊数が9,367冊ということで、実はおととよりも2,000冊以上の減とはなっているのですが、それでも他校と比較したら、すごいなと私は思っています。

また今年度も、女川つながる図書館と連携しながら、子供司書養成講座の取組と、子供たちに本を読む楽しさとかわくわく感とか、そういうものを感じさせてくれるような工夫が随所に見られて、すばらしいなと思っているところであります。図書室に伺ってもそういう工夫が至るところに見られます。すばらしいなと、ぜひ続けていきたいと思っているところであります。

続いて、体力面について。

実は、体力運動能力テストの結果を見ますと、業前マラソンを継続してきた結果、持久力が向上して、多くの学年で20mシャトルランの回数が向上しました。

また、女子のソフトボール投げで全国水準に近い結果となりましたが、全体的には、ほとんどの種目で、すべての学年において全国水準よりちょっと低いという課題が残ります。

「うみねこルール」、3ページの下にありますが、見ていただ

きたいと思います。

相変わらずという言葉は変ですが、高い数字とはなっているのですが、これは自己申告ですので、本当かなとちょっと疑問に思っているところであります。

続きまして、4ページ、中学校に入らせていただきたいと思います。

生徒数は、ここ3年103名、3年続けて103名。小学校同様、5月6日付けで山形県東根市から第1学年男子生徒が転入してきました、103名となりました。

教職員32名でありまして、中学校におきましても、町費負担職員が5名ということで、小学校と合わせて11名配置していただいております。

この学校規模で11名というのは、恐らく県内では本町だけだろうなと、本当に心から町当局には感謝を申し上げているところであります。

不登校生徒につきまして。

昨年度は8名ということで、103名という全校生徒数の割合、いわゆる出現率で見ますと7.7%になります。全国や県と比較してみると、全国が昨年度は4.09%、宮城県が4.61%ですので、ちょっと本町は高いという数字になっています。

本年度につきましては、第2学年の生徒が2名該当しております、そのうち1名については、残念ながら全欠に近い状態となっております。

しかしながら、小学校同様、担任や学年、さらには養護教諭等が中心となって、家庭や生徒との糸を切らさぬように頑張ってもらっているという状況であります。

また、子供の心のケアハウスの先生方にもご尽力をいただいておりまして、今年は、中学校第3学年の生徒がお世話になっております。

いじめにつきまして。

昨年度は6件の認知件数でしたが、すべて解消していて、小学校と同様に、重大事案に発展しそうないじめはありませんでした。

先生方には、小学校と同様に、年4回のアンケート調査や普段の生活の中からアンテナを高くして、いじめの未然防止に努力してほしいという話をしているところであります。

学力につきまして。

小学校と同様に、理数教科が課題だと捉えています。特に数学

については、先程小学校の説明でも話をしたのですが、何より毎日の積み重ねが大事になる教科であります。

表が三つ並んでいますが、その中で、上二つの表の数学の欄を見ていただきたいと思います。

昨年度4月に行った全国学力・学習状況調査と12月に行った標準学力検査の結果です。

残念ながら2回とも全国平均には及びませんでしたが、12月の数学の結果から明らかに全国との差が小さくなっているのが分かります。

これは何を意味するのか。第3学年ですから、高校入試に向けて本格的に勉強を始めて、その成果が出てきたものと私は捉えています。本気になって学習に取り組めば伸びる子供たちなんだという証かなというふうに押さえているところです。

ただ、本気になって学習に取り組む時期がちょっとだけ遅すぎるかなという気もしています。そう考えた時に、やっぱり小学校の低学年から、家庭学習を含めた学習の習慣付けが大切なだろうなと改めて感じているところであります。

皆様ご存じのとおり、先程小学校の「うみねこルール」の話をしたのですが、中学校にも「スーパーうみねこルール」があります。

新福委員からいつも褒めていただくるルールなのですが、中学校の項目は三つしかなくて、ご存じだと思うのですが、その中で三つ目の「週3日以上家で勉強のために机に向かう」という数が、今年の第3学年もなのですが、中学校の場合は第1学年、第2学年、第3学年と上がるにつれて、どんどん下がっていくんですね。それはそれとして、大人になっているんだなどと思いながら見ているのですが、ただ、実は30%くらいしかいない。週3日机に向かっている子が30%といえば、3分の2以上の中学校3年生が座っていない、つまりあまり家では勉強をしていないということかなというふうに思っているところなんです。そのあたりが一番の課題というか、そのあたり10分でも、20分でも、30分でも、中学校第1学年あたりから継続して勉強を始めていけば、高校受験なども変わっていくのかなと思っているところです。

このルールはこのルールとして、新福委員おっしゃるように、子供たち自身が考えたものなので、尊重しながらも、ただ、このあたりについて子供たちの心を耕すというとおかしいのですが、話をしながら少しづつ向上させていければいいなと思って

いるところであります。  
6ページをご覧いただきたいと思います。  
進路指導についてです。  
記載のとおりなんですが、今年の第3学年については、仙台方面のいわゆるナンバースクールへの進学を希望している生徒もたくさんいます。ぜひ頑張ってほしいと思っているところであります。

体力面について。  
そこに記載のとおりなのですが、今年の第3学年男子については、運動能力が高い生徒がたくさんいて、運動能力テストにおいても多くの種目で全国水準を超えていました。学年によっては差があるというところかと認識しているところであります。  
以上、説明させていただきました。

報告は以上となります、ぜひ忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げまして、話を終わります。よろしくお願ひします。

教育局長 ありがとうございました。  
ただ今、教育長からご報告をいただきましたが、何かご質問等ございましたらお願ひいたします。

町長 ありがとうございました。  
先程の学力考査というのかな、いわゆる学テですかその辺のお話があって、「スーパーうみねこルール」のお話もありました。週3回机に向かわない子が3分の2くらいという話で、本気になるのがちょっと遅いのかなというお話だったのですが、そうすると、ほかはもっと早いということですね。こちらが3コーナーにいる時に、ほかの人は4コーナーでラストスパートに入っていてという話ですよね。競馬とか陸上でいえば。追いつけなかつたり追いついたりというのはその人それぞれなのでしょうけど。

だとすると、伝統的にはどうなのだろう。ではその仕掛けが遅いのかと。多分そうでもないのだろうなというのは、先生方も異動で当然変わりますし、ほかのところではこうだよね、女川町だけ空気がのんびりしているねということでもなさそうな気はするのですが、ほかを知っているからこそその部分での何かしら赴任してみての違いは、教育長の中で感じられる部分というか、空気感とか、文化とか、何かありますか、そういう部分で。あとで議事のところでちょっとだけお話をしようと思うのですが、ほとんど基本的には、石巻の子も仙台の子もあまり変わら

ないかなと。三十何年教員として中学校生活をやって中学校しか知らないのですが、質と言ったらおかしいですが、三十何年たっても根本の部分は変わっていないような気がするんですね。

ただ、今どきの子ということは感じるんです。例えば昔だったらスマホとかそういうものもないし、情報もあまり入ってこないんですよね。そういう部分で、どうしても夜も遅くなったりということ。

ただ、決定的に違うかなと思ったのは、仙台に私8年いたのですが、あの当時から勉強は、中学校の第2学年の後半から少しずつ変わる子が多いなと。石巻も含めて、どうもスパートの時期が中総体終わってからという子が多いなという感じがしていて、何とかという気持ちはずつと思っていました。これは女川に限ったことではなくて。実はまだ一人一人ゆっくり、知っている子はいっぱいいるのですが、じっくりお話をしたことはないので雰囲気しか分からぬ部分はあるのですが、そんな感じですかね。

もうちょっとだから何か仕掛けを早くするとか、小学校から、先程申し上げたんですけど、女川のルールは女川のルールとしてあるのですが、家庭と連携しながらというか、なかなか難しい課題がある。ただ、学校の教員としての力かなと。中村委員おっしゃっていただいたことがあるのですが、そういう部分で何とかならないかなというふうに思っているところです。

町長 今、中村委員のお名前も出たのですが、女川だけが多分特別ではないとすると、ではほかの理由があるからやはり、それは差がつくという言い方がいいかどうかは分からないですが、傾向としては平均よりいつも下というのが続いているのが、別なところに多分何かあるのかな。

中村委員 市や町によっての違いというのではなく、今まで学校教員をしてきた中で感じるのは、学校差だと思います。

例えば石巻市内でも進学率の高いというようなイメージを持たれている学校と、また違う学校というか、それは地域の差もあって、その保護者の雰囲気もまた違っている。

学力の高いところで維持をしている学校というのは、学校そのものの伝統みたいなものもある。その自負、先生方の自負、それと地域のそういう伝統を大切にするというか、その学校としてのイメージ、自分たちのところは高いんだというイメージを大事にしているという、そういう雰囲気があります。

それから、やはり低くなってしまうと、生徒指導も含めてだいぶ荒れているところが多くて、それは学校のもちろん教職員の指導力というのもあると思うのですが、やはり保護者の部分で生活習慣がきちんとしていないとか、そういうものも含めた中での学力という部分がすごく影響していると思っています。

ただ、いつまでも家庭だけの責任に、家庭が悪いからどうのこうのというのではなくて、家庭がそうであれば、学校はそれに対応した指導を工夫していかなければいけないと思っているので、そこは、最終的には学校として子供たちをどのようにして、学力だけでいうなら高めていくかという話し合いとか、それから、自分たち教職員の質の向上を目指した取り組みをしていく必要があるのではないかと思います。

女川だけが違うということではないと思います。雰囲気的に、ただゆったりはしているとは思うのですが。学校というか、地域そのものも含めて、穏やかというか、そういう良さはあると思います。だから直前になると慌ててしまうというのもあるのかなと思います。

教育長

力はあると思いますよね。国語の勉強ができる。前にもお話を教育委員会でもさせていただいたし、町長にもお話をさせていただいたとおり、力はある。国語ができると。私、国語の中学校の教員なので余計感じるんです。何でももっと鍛え方かなと思っていて、小学校の子たちも本も読むし。だとしたら、面白い授業とか、いろいろな部分でもっと伸びるよなとすごく感じていますね。

非常にもっと浜っ子というイメージがとても女川の子に強かつたのですが、あまり荒々しさは感じないし。あまり余計なことを言うのは。皆さん言っていて、言葉が悪いんですけど、浜の子供たちはバーンとすぐ感情の起伏が激しくて、今はちょっと違うかなという感じがするのですが、私の頃はとてもはつきり出ているような感じで、先生を先生と思わないというか、もう半分大人になっているというか、浜の人たちもそういう目で見るんですね、中学生を。ある程度そういう部分がちょっとあつて見ていたのですが、登校している姿を見てもみんなかわいいし、学校の授業の様子とかを見ていても決してそういう子もないし。ただ、ちょっと感じるものはあるので、あとでその部分についてはお話をさせていただければと思っていました。今のお話の中で、なるほどなど。石巻だと先程言ったように「石中、石中」みたいなものがあるじゃないですか。仙台だと幼稚

町長

園とかから始まって上杉山小学校と。何がいいのかみたいに思っていたのですが、何かそういう校風ではないですが、文教地区みたいなこと。だから、いろいろやはりそういうものがあるのででしょうね。なぜそこだけいいのというか、学力でも実際に高かったりするし、何となく格も上に置かれているわけです、そういう学校は。毎年子供たちは変わるはずなのに、ここだけが突出してという理由は、なぜか突出してブランディングされているのか。それも公立校ですよ。なぜかなと思っていて、やはりそういうところがあるのでしょうかね。今、中村委員おっしゃっていただいたようなことが。

一方では、そのおおらかさというか、そこは本当はいい意味で武器というか、学力の部分だけに囚われないで見ると実はすごくいい武器もありますよね。その子の持っているいろいろな可能性を別な形で発揮させたり、本人をそこに向かわせてみたりという空気感にもなっているでしょうし、そこはそこですごくいいことだと思います。

中村委員  
1年生に入学てくる子、そういう伝統校というか、格付けのあるというイメージの学校でも、入学てくる1年生というのはほぼ同じで、どこの学校の1年生も同じなのですが、その後です。早く変化があるというのは。だから学校そのものの雰囲気とかがそういう子を育ててしまうというか、先生方の力どうのこうのよりも、その学校の校風であったりが変えていくということがあります。そういうのをすごく入ってみると分かります。女川町でも学校そのものがそうなれば、先生方がどうこうよりも、学校そのものが子供を育てていくという、そういう部分までいければいいのかなと思います。

町長  
ありがとうございます。

私がきっかけで始まった話ですが、各委員から今のところで何かあつたらお願ひいたします。

新福委員  
一つあるのですが、この数値で見るとかなり全国と差がある、県とも少し差があるのですが、数値というのはいろいろなものを平均化して総合化して出してしまって、そこで考えなければいけないのが、女川の子供たちの層の中で学力、どういう部分の学力に合う子たちが多くて、どういう子たちが少ないのかというところをきちんと分析しなければいけないかなというふうに思います。

そういうふうに仙台圏内の進学校に進む子が何人か今度、来年度の卒業生で希望しているという子を考えると、何人かそうい

うふうに学力の高い子がいて、でも平均が低いということは下位層に固まっているのかなと。ということは、この下位層の子たちを真ん中くらいに持ってくれれば、平均は自然と上がるわけで、そこにターゲットを絞って学校教育をやっていくということが求められているのかなと、数値を見てそういうふうに思うのですが、ただ、でもどうやってやるんだとなると、かなり難しい部分も実際にはあるとは思うのですが、でも授業の中で先生方が工夫をして、そこに向けて授業構成をやっていくとか課題を出すとかとやっていくと、その子たちが上れば平均も上がっていくという、そういうのが求められているのかなと私は思います。

町長 平均だけ点数を上げたいのであれば、例えば今回の国語だったら、100点取れる子一人いると3ポイント上がるんです、女川の場合。でも、そうじゃないですね。やはり今、新福委員が言われたような方向であるべきなのでしょうし。

ただ一方で、私前から言っているように、伸びる子をどんどん伸ばしてあげてほしいということですね。それはそれとして、伸ばすというよりは、伸びようとすることを妨げないですよね、正確に言うと。本人が伸びようとしているところを、待て、待てと抑制するのではなくて、勝手にやらせてみたらというような部分で。そうすると成長する人は本当に成長していくんですよね。ということも思ったりします。

教育局長 ほかにご意見ございましたらお願いいたします。  
私はちょっと違う側面から、学校の外から見た意見を出したいと思うんですが、何回かお話をさせてもらっているように、このスロースタートの要因になるものとして、石巻という地域柄と女川という地域柄で話をさせてもらうと、まず石巻というものに関しては、高校の倍率がすごく低いので、そこまで早い段階から頑張らなくても入れるという先輩たちの実績を彼らは見ているので、それにのっとって11月からやっても大丈夫だよねとか、1月からやっても大丈夫だよねという高をくくったようなところはあるなというのが、石巻の傾向かなと思っています。女川に関していうと、多分石巻の子と女川の子の違いというのは、意識の違いというか、石巻の子たちは、学校のそれぞれの色だったりというのももちろんあると思うのですが、それぞれがみんな塾とかに通っている時に、隣に座っている子が全然知らない中学校の子だったりして、違う学校の子だったりすると、そこでその差というのを常に感じられるというか、この学校の

この子はこれくらいできて、自分はこれくらいだと、同じ高校を目指していて、これくらい差があるんだということを無意識に常に感じられる状況があるのかなと思っています。

女川に関しては、うちもそうですが、昼も夜も同じ顔ぶれで、同じようなメンバーがのほほんとやっているので、出来上がっているレースを常にやらされている感があるので、どうせ1位はこの人で、2位はこの人で、3位はこの人でというふうになるようにもうなっているレースをただ走らされている感はあるのかなと思っているなというのは常々思っていて、石巻の子たちは、我々はあまりやってはいけない話なのですが、テスト問題なども、A校のテスト問題をB校の子にやらせるというのもやっているので、常に、あの学校の問題はこれくらい難しいことを普通にやっているんだとか、こっちの学校の問題はこんなに簡単なんだというのを考えることは常にできるという状況にあるんだなというのは、すごく女川の子と大きな差があるのではないかなと。そこに意識の違いというか、ちょっと焦る気持ちというのは、断然女川の子よりも時期的にも早く来ることはあるではないかなというのは、何となく個人的に思ったりはします。

町長  
山内委員

すごく分かる話だと思います。  
非常にあれなんですが、現実的に見ていて、そう感じるなというのはあります。その状況を打破するのは、方法としては難しいのかなとは思いますが。

町長

では、どこでスイッチが入るとか火がつくかなのですが、最終的にそれが入らないまま、だったらここでいいみたいな、今の自分が頑張ってもうちょっと高いハードルに挑んでみようかではなくて、今の自分のままで、そのまま飛べるハードルの方にだけ行ってしまう方が多いのでしょうかね（「そう思います」の声あり）そういうところに、モチベーション的に火をともすみたいなことというのは、なかなか大変といえば大変ですよね。常に外部との関係性を意識させるというか、学校の先生方も多分実力テストだ何だと、外はこうなんだ、石巻の子たちはこうなんだよという語りかけを多分すごくしていると思うのですが、もっと具体的に違う形で、彼らがもうちょっと意識しやすいというか、なじみのあるようなもので彼らに考えさせるようなものという材料がもっともっと必要なのかなと思ったりはします。今、新福委員や中村委員の話を聞いてずっと納得していたのですが、やはり、先程中村委員がおっしゃっていたのですが、学

校の持っている雰囲気だったり、O Bはじめ、いろいろ人たちが持っている期待感だったりというものをいつの間にか受け継いで、ある層がそれを具現化してくれている。そこに入っていくと、何となくあまりピンとこなかったグループもちょっと引きずられると。その辺というのはすごく実は大事な要素というか、先程から言っているように、大きな違いはほとんどないんだけど。それを考えると、例えば今年ほかの仙台圏を受験する子供たちが何人もいる。そういう子たちがまたしっかりした結果を出す。それで去年はこうだったんだよとなれば、そういうことが少しずつ具体例として発揮していくというか。だから、そこのところがすごく大きいのかなと。

私が中学生の時を思い出すと、一番遊んでいた人が一番頭良かったんです。ほとんど、いつ勉強しているんだと聞いたことがあるのですが、8時から2時間くらいかなと。確かにいつ見ても、がっかり夜暗くなるまで大人と将棋をしたり何かをしたり、ひたすら遊んでいるというイメージしかないんです。いつ勉強しているんだと思うような人が。ということは、集中力の差なんだなといつも感じているんですよね。

だから、長時間向かいなさいではないから、メリハリをしっかりと。ゲームやって何やってということも、いいから、たくさんやりなさいと。ただし1日1時間か1時間ちょっとやる、やらなければならないものなど自然に思えるような形を何となくつくっていかないと。

非常にそういう点では、先程の浜の子の気質のお話もありましたが、今は本当に浜も何も。なぜそれが昔あったかというと、それぞれの浜にも学校があって、それぞれがプライドを持っていると。だから町場の子に負けるなよという気持ちも当然あったと思うんです。それがうまい具合に、先生方なども、ほかの中学校にいれば、第一中学校に負けるなよとか、負けさせたくないなという思いもあったろうし。だからそういうちょっとした微妙なところの差が、結構最終的には大きな差になっていくのではないのかなと思うので、取っ掛かりとしては、今あるいは素材を何とか伸ばすと。それが次の刺激にいくといううまい循環を何とかつくっていかなければとは思っています。

町長 聞き取りと集中力の両方かなと伺いながら思いました。

あと山内委員のお話で、ああ分かる、分かるみたいな、自分のうちの経験でもすごく分かっているので。母集団がゆっくりだとやっぱりなるし、これが高校だと全然変わったりもしますし。

そんなものかなと思ったけど、やはりそうなんだと思ったり、自分のうちを見ていて思うわけで。山内委員のお話などはまさによく分かりますし、今の横井委員の話、昔いましたよね。ナンバースクールを受けようという子が、ナンバースクールに行くこと自体は別に成功とかではなくて、いいことだというわけでももちろんないと思うんです。結局、今の現状だと、自分の今の力の点数で頑張らなくても行けるところという基準で選んでいるのではなくて、自分が将来こうなりたいからといってそれぞれの学校を選ぶのだったら、これは一番すばらしいことなんだけれども、その頑張る、頑張らないは別にして、今の自分の今まで楽をしてというのか、頑張っている子ももちろんいる前提で、あまり頑張らなくても行けるところが結構多いというところの方が、いろいろ考えなければならないのかなと思いつつ、ナンバースクールへ行くという意欲の高い、つまり学力である程度点数を取っている子たちが複数いたとして、平均が低いと、やはり下位層というのか、なかなか頑張れない子の側に対してどうするかということに、新福委員が言うかのようなところになるのでしょうかね。

教育長

学校の教員をやってきましたが、これをやったから伸びるというのが証明されるんだったら、とっくに世の中変わっていますよね。

いい勉強法あるよ、こういうものがあるよといっぱい言われて、自分が中学生の時もそうでしたよね、考えてみれば。この参考書がいいよとか、これをやればこうなるよと。でも、すごく聞いていてそうだよなと思うこともたくさんあって、例えば、本当に恥ずかしながら、刺激の話、横井委員とか新福委員、山内委員の話もそうなのですが、私の母校は男が5人しかいなかつたんです。5人のうち、どこの高校へ行くといった時に、3人石巻高等学校に入ったんです。なぜかというと、その前の先輩たちが石巻高等学校に入るとすごいから面白いぞということを言われて、伝統的にそういうものが伝わってきていたんです。だから多分、私も勉強のスタートが遅かったのですが、勉強して入ったかなと。石巻高等学校に入ることがいいとかそういう話ではなくて、ただ、そういう部分が、小さい学校だったけど、あったな。いわゆる刺激の面でいうと、私たちの頃は宮城学習会とか模擬テストがあったんですよね。懐かしいと思うんですが、そうすると、学校ごとに平均点が出るんですよね、昔。宮城県で1番を取ったんです。5人しかいなかつたので3回くら

い1番を取りました。頑張って。だって5人しかいなくて、ある程度取れば、370～380点くらい取れば平均が1番なんです、宮城県で。やった、一番自分たちが頭いいんだみたいなことを言って、ぱっと見ると、あの頃ですから、宮城県の1番からベースと（「表紙に載るのが目標みたいな感じでね」の声あり）そういう刺激があった（「男女別の100人に載るのが目標みたいな、昔」「そういうのあったの」の声あり）そうなんです。高校に行った時に、名前が載っている人をいつの間にか覚えたくらいにして（「懐かしい」の声あり）そういう時代だったので、逆に世の中、今、全国からだめ、だめと、羅列化というか、そういうものはだめとなってしまって、中学校教育は本当に大変だったんです。二十何年前にすべてだめ、廃止になって、どう進路指導をしていくと。確かに点数でやっているわけではないし、いつの間にかそういうふうになっていって、何か点数的にもグーッと下がっているような気もしていて。これは宮城県だけの話ではないのですが。

町長  
教育長

全国同じなのかな。  
そうなんですよね。刺激という部分について、何かあると違うのだろうなと思ったことが一つと、もう一つは、重々ご存じだと思うのですが、勉強できない子を、120点しか取らない子を150点にする力と、410点取っている子を450点まで上げる力というのは、後者の方がずっと難しいですよね。個別最適な学びと今言われていますが、それは分かるのですが、できる子をさらに伸ばすという部分がものすごく難しいです。  
できない子に、こうできたね、次はこれやってみようねと言うのは誰でもできるというか、教員ではなくても、もしかすると。でも、そういう部分が今の学校教育の中の課題かなど。女川町もそういう感じがするんですね。  
だからそういうできる子たちがグンと上がっていって、全体的に、先程新福委員が層の話をなさったのですが、そんなに層的には、今の中学校第3学年は、確かに下の子はちょっと、二極化、どちらかと言うと。いい子はいいのだけど、勉強していない子は勉強していないという部分なので、こちらをスライドすれば、上げていけば上がるなということは分かるのですが、この層をいかにもっと上げていくかというのがどういうふうにしたらいいかなと今考えているところでした。  
ちょっと違う話かもしれません、できる子はいっぱいいるので、その子たちをいかに伸ばすかが多分鍵であるし、できない

	子もいっぱいいるので、そのあたりも併せながらやっていくしかないのかなと思って聞いていました。 長くなりました。
教育局長	そのほか何かございませんか。よろしいでしょうか。 (「はい」の声あり)
教育局長	それでは、「報告事項」につきましては、以上とさせていただきまして、これより、次第5番の「議事」に入らせていただきます。 ここから先は町長が議長となり進行することとなりますので、よろしくお願ひいたします。
町長	では、正式に議長というか、議事を進行させていただきます。 議事は、大きくは二つです。「本年度の取組の重点について」と、先程ありました「休日の部活動の地域移行について」ということでございました。一個一個進めてまいります。 時間も、すみません、私が最初に何か言い出したのですが、限られている中ではございますので、説明をよろしくお願ひします。 では、教育長からご説明、1点目をお願いします。
教育長	座ったままで申し訳ございません。 それでは、議事「(1)本年度の取組の重点について」、今皆様からお話をいただいたことと非常に重複する部分はあるのですが、よろしくお願ひしたいと思います。 6月の議会の一般質問で教育長としての所信を問われて、答弁させていただいた内容と重複する部分がすごくあるのですが、町長にも教育委員の皆様にも説明させていただいた内容かなとは思うのですが、改めてよろしくお願ひしたいと思います。 それでは、まず、資料1をお開き願います。 こちらが「女川町教育大綱」でございます。 改めて確認をさせていただきたいと思います。 まず、本町のめざす子供の姿を、「志をもって、未来を切り拓いていく子供」として、四つの基本目標、そして六つの施策の基本的方向と10の重点的取組を中心に、その具現に努めているところでございます。 その中でも、本年度につきましては、「女川の子供たちは、女川の教員が育てる。みんなで育てる。」のスローガンのもと、10の重点的取組の中から、①の「自立のための「みやぎの志教育」の推進」、それから、⑦「教職員の資質・能力の向上」を重点的に推進していきたいと考えています。 なぜそう考えたのか。先程町長から言われたのですが、実は空

氣という話があったのですが、4月から何度か学校に足を運んでいるうちに感じた、まさしく空気と申しますか、先生方の授業の様子、子供たちへの指導の仕方、子供たちの挨拶の仕方、授業への取り組み、さらには町民の皆様の期待等を考えて、私なりに絞り込んでいったものとご理解いただきたいと思います。また、「自立のための「みやぎの志教育」の推進」について御説明させていただきます。

施設一体型小中一貫教育学校としての特徴を最大限に活かすためにも、資料の2ページをお開きいただきたいと思いますが、「女川プラン」の意図的・計画的な実践が私は不可欠かと思っています。

その中でも、(1)学習指導においては「小学校への乗り入れ指導」、志教育を含めた取組では(2)の「女川生活実学」、そして(4)①の「挨拶・礼儀作法」の下にあるのですが、「女川っこしぐさ」の充実がその柱になるものと考えています。

「女川っこしぐさ」につきましては、資料の3ページをお開きいただきたいと思いますが、掲載させていただきました。これは、かつて女川の教育を考える会が立案したものと伺っています。すばらしい内容ですので、復刻版としてぜひ復活させてほしいということを4月当初から話を聞いて、今、頑張ってもらっているところであります。

志教育におきましては、活動を通して町内外の様々な方々と出会って、体験や新たな発見から将来への夢とか志への気付きが生まれて、それが故郷女川で生きていることへの感謝や誇りに高められるような活動になればいいなと願っているところであります。

7月24日に震災後初となる「おながわみなど祭り」実施されました。小学校は鼓笛隊、中学校は吹奏楽部の演奏で祭りに花を添えさせていただきまして、よかったですなと思っているところなんですが、私は、次の日の朝に実施した、有志中学生による町内ごみ拾いもすばらしい取組だなと思っています。これは、女川小・中学校の新たな伝統としてぜひ未来永劫受け継いでいってほしいと思っています。

今後も、様々な形で子供たちを校内から外へ出して、その活躍を認めていただくような機会を持つよう学校に働きかけていきたいなという思いを持っていいます。

本当は、町民運動会、10月10日でしたか、実施の時は中学校第3学年にボランティアとして参加してもらって、女川を盛り

上げてもらおうかなと計画を立てていました。残念ながら中止になってしまったので、次年度こそは、そういう町の大会などにもぜひいっぱい子供たちにも参加してほしいと働きかけていきたいと思っているところであります。

これまでの進捗状況ですが、「小学校への乗り入れ指導」と「女川生活実学」については、順調に進んでいるとそのように校長からも報告を受けています。

ただ、「女川っこしぐさ」の活用について、このあたりについては4月当初からの取り組みですので、現在、生徒指導部会を中心にして少しづつ動きが見えてきているかなというふうな状況だとご理解ください。

続いて、「教職員の資質・能力の向上」についての取り組みについてご説明をさせていただきます。

先程から話題になっていますが、まさしく私は子供たちの学力向上への本道だと思っています。ぜひ教員一人一人の指導技術の向上が不可欠だとそのように思っていますので、いま一度原点に立ち返らせながら、昨日より今日、今日より明日と自己研鑽に努めることのできる教員を目指させるためにも、先進校への視察を含めて、校内での研修会等の一層の充実を図りたいと考えております。

資料4、教育の研修計画を見ていただければと思います。

校長と相談して、このような形で令和4年度の現職教育を含めた、いわゆる研修計画であります。

前述の礼儀作法指導等を含めたものとなっていまして、伝統校へ、先程も出ましたが、先輩教師に学ぶ機会、あるいは全国学力・学習状況調査日本一の村、秋田県東成瀬村があるのですが、そこへの研修等を考えています。

実はこの東成瀬村というところは、秋田県の中でもナンバーワンなんです。本当に全国ナンバーワンをずっと取っている村で、小さい、本当に小学校、中学校1校ずつしかないんです。そういうところなんですが、家庭学習の取り組みにもちょっと面白いアイディアがあって、ぜひとも見て、しばらくここ2~3年継続して、教育委員会、それから学校の職員も派遣して、私も学んでこようかと思っているところであります。とにかく実のある研修となるように教育委員会としても学校をバックアップしていきたいと思っているところであります。

資料5を見ていただければと思います。

これまでの「教職員の資質・能力の向上」に関する取り組みに

について、特に小学校においては、実は初任者層の教員が多い現状を鑑みまして、今日はいないのですが、坂本教育指導員と、田中指導主事が毎日のように学校に通って、一緒に授業の組み立てを考えたり、アドバイスをしたりしています。

その記録として、このような形で毎回、坂本教育指導員は授業を見て、よかったですを、本人に渡しながら確認しているということをずっと行っています。そういう取り組みがあって、教員としての幹を太くしてほしいという願いというか、そういう部分においてもすばらしいと思っていますので、ご紹介させていただきました。

それから本年度も、山内委員いらっしゃるのですが、女川向学館の先生方には、継続して学校、子供たちへの支援をいただいている。本当に全国に誇るべき連携かなと思っていて、教員にとっても、一緒にいていただくというだけで力になっているのではないかと思っているところであります。

隣にいらっしゃって非常に申し上げにくいのですが、今後ともよろしくお願ひ申し上げたいと思います。

最後になるのですが、子供たちからぜひ、先生いいねと、先生みたいになりたいと。あるいは、町民や保護者の方々から先生頑張っているねと本当にリスペクトされるような、教員として独り立ちできるように我々も全力で応援していきたいと思っています。

(1)については、以上でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

町長では、「本年度の取組の重点について」ということで、新教育長体制下で初年度となる今年度の受験、何回も強調している。ということで、ありがとうございました。大変頼もしく思っておりますので、頑張っていただければと思います。

また、現場の先生方、今、教員の皆さん之力の向上ということにすごく取り組まれているなど。この秋田などは私も行ってみたいなと思います。機会があればぜひ組んで、タイミングが合えばと思うところでございます。

では、委員の皆様から、でもこれは教育委員会でやっているものだと思いますので比較的、でも本当はこういうことを言いたかったんだというようなことがあれば、ぜひとも思います。皆様からご意見ですとかご提言、あるいは質問でも結構でございます。何かありましたらどうぞご発言いただければと思います。私もここに来る前にいろいろなところを考えてきたのですが、

新福委員

議事に取組の重点というのがあったので、今女川で必要とされているのはどういう取組なんだろうかというふうに思いながら来たのですが、その時に考えたのは、7番、全く一緒だったのをちょっと驚いたのですが、やはり学校を回って授業とかを何度か見てきましたが、これまでの授業の取組の中でよかつたなというのが、一回旧校舎であった時に理科の先生の授業がものすごく印象的で、あれがすごくよかつたのですが、それ以外の授業というのは、えーとという感じのものが結構あって、もう少し技術力を上げてやっていかないといけないのではないかなということを、常々授業を回りながら感じていました。

そういうことを考えると、やはりこの「教職員の資質・能力の向上」というのは、本当に力を入れてやっていく必要があるかなと。これがあれば、学力の面にも跳ね返ってくるし、家庭でも学習しようという意欲を喚起するようなことにもつながっていくと私も思っているので、私もこれは本当に賛成です。

ただ、一つ付け加えると、やはり教科指導の方にもう少しシフトした方がいいかな。特に中学校の場合は、教科で研修するというのが、石巻地区で年に何回かやっているみたいですが、それだけでは足りないかなという印象があるので、教科のもう少し資質を上げるような、技術力を上げるような、そういう研修みたいな機会を与えればいいのではないかと私は思っています。以上です。

町長  
教育長

教育長は何かございますか。

おっしゃるとおりです。頑張ってはいると思います。ただ、新福委員おっしゃったように、多分、分かっていない部分は分かっていないかなと思うんですね。これをなぜあなたはこういうことをしているんですかと。何を教えようとしているんですかということがはっきり分からぬ。

I C Tの世の中になってきて、例えば I C Tでバーッと映して、子供たちはうんうんとなるのかもしれないですが、終わったあとに今日勉強したことは何だっけと言った時に、私などもよくやったのですが、さっぱり答えられない子もいっぱいいるわけなんです。何か印象に残った授業、楽しい、楽しいと。ハハハ、ウフフとやって終わっているとか。何かそういうふうな、本当にこの授業の中でこういう力とか、こういうふうな能力とか、こんなことが分かってほしいという部分で臨んでいるかなと。何か一つ一つ一生懸命やっているのだけど、それがすべて中途半端になつていなかなということを、中堅の先生にも感じま

す。初任層の先生方はしょうがないかなと思っている部分が半分あって、だからこそ、出稼ぎではないですが、いろいろなところに行って見てきなさいと、見るのが一番大きいと思って。何か今まで先生は十何年やってこられたよね、その割には子供たち集中していないよねというのが、実は4月から見た時に感じたことなのです。それでやはりもう一回だなというふうに思いました。

すみません。全く違う話なのですが、挨拶は、私4月に行っていて、3割の子たちはちゃんとやります。あの3割の子たちが普通、あと4割の子たちはできませんというのが私の4月の印象でした。コロナ禍で大きな声を出せないとか、そういうことはどの学校でもそうなのですが、誰かが来たら、地域の方々はすごく大きい立派な挨拶だったので、体制はすごくできているので、その部分についてはもったいないなと思っていて、こんなにかわいがってもらっているのだから、あなたたち、きちんと挨拶しなさいと言いたくなるような雰囲気でした。

ところが、月2回ずつ行かせてもらっているのですが、少しずつ変わってきているような気もします。先生たちが頑張ってくれているなど。

連動しているかなと思っていて、先程の伝統に戻るわけではないですが、そういう部分がちゃんとできないと勉強はできないなど私は思ってしまうんですよね。品という言葉を使いたくないのですが、女川小・中学校の子は品があるねというのが、私の中での究極の目標なんです。やっと自分の中で言葉が出せるなど。なぜこう、何を言いたいのだろうな、自分でもよく分からぬ部分もあってここまできたのですが、今やっとはっきり言えるのは、女川の子たちはちょっと石巻と違うよねと。品がある。礼節もきちんと押さえている子が多い。勉強もちゃんとできるというふうになっていればいいなという願いがあります。女川は、私が学生の頃は、きちんとしている学校のイメージしかないです。そういうふうに地域は見ていましたと思います。私だけではなくて。分かりません。中に入ったわけではないので（「立派でしたよ」の声あり）立派でしたよね。

町長 でも、品があるってすごくいいことだと思います。

女川の子供たちは、学力はそれこそどうこうではなくて、やはり違いは、品ということもそうだし、私が前から言っている考える力というか、いろいろな、だから実学のこともやってきたのですが、そういう部分で、女川の子供たちはそこがしっかり

しているよねというふうになるとすごくいいなと、私自身も思います。

一つ私からなのですが、教員、先生方の実力、すごく大事なもので、学力だけのことをそれこそ言ったら、今どき e ラーニングで日本で一番授業のうまい人のものを見せて、それが終わったら、分からぬところを現場の先生が教えた方が余程点数が取れるというような話をしたことがあるのですが、それは研修とかいろいろな場で先生自身が学ぶというのか、そういう先導的なモデルだとか、一つの在り方もそうなのですが、ご自身の授業だとかやり方とかを客観的に見る機会はあるのですか。

というのは、これもタイプによるのでしょうかけれども、例えばテレビによく出る芸人さん、自分の出たものは必ず見るという人と、全く見ないという人、多分 2 種類いらっしゃると思うんです、大きく分けて。ほかのエンタメの世界でも多分同様だと思うんですよね。映像で残っているもので、例えばミュージシャンだとライブだとかを全く見る人と見ない人と多分分かれるだろうし、いろいろあると思います。素人でも、例えば自分は自分のやったライブとかの映像は何回も見ます。わー、恥ずかしい、ここ失敗したなみたいなこととかを何回も確認したりするのですが、もちろん見ない人もいるわけですよね。

先生方はどちらなんですか。毎日のことだから多分見ないのかなとも思うのですが、どれくらい客観視というか、ここをもっとうまくやるのは、ここをこうすればよかったみたいに、そういうやり方で確認するようなことはあるんですか。

難しいですね。そういう時間的余裕がまず先生方にはないというのが一番大きいのかなと思うのですが、自分の授業をまずつくるということが、それだけで精いっぱいというのが現状だと思います。

ただ、女川の場合は、指導される方が中に入っていって、それで授業を見てくださってアドバイスをしてくださるというのはすごくありがたいことだと思います。だから、そういうものをすごく活かしていく必要はあるのかなと。

先生方は、どの授業を見ても一生懸命なのです。本当にどの教室も先生方は一生懸命なのですが、ただそこで終わっているというか。だから自分の授業のどこが、つまり足りないのか、まづかったのかとか、どこがよかつたのかということもきちんと把握しないので、ステップが上がらないというのが大きな要因かなと思います。

中村委員

今、指導する側もあまり言わなくなっているというのもあるのかと思います。昔は指導すると泣いたりする先生もおりました。でも泣くくらい悔しい思いとかもするし、本当に細かいところでも、言われた方はかえって覚えていくんです。だからそういう指摘を、ちょっとかわいそうな気もするけれども、指摘をした方が、そして先生方もその指摘を受けた方が伸びると思うので、もう少し具体的に、ちょっと厳しいかなと思う指導でもしていくことが、将来的にはその先生の資質向上に大きく貢献することにもなるので、恐れず指導するというのがまず先生方を指導する側に大事なことだと思うし、また、先生方もそれを受け入れて、そこからまたさらに高い指導力を高めるための意欲というものにつなげていければなと思います。

ただ、女川の先生方を見ると、そういう雰囲気は、指導を素直に受け入れてくださるような先生方のように思いましたので、臆せず指導するというのはすごく大事かなと思うし、その回数もどんどん増やしていくべきかなと思います。

私などはちょっと授業を見ると、昔教えた子に何だかんだ声をかけてくるのですが、悪いことだけ、ここはだめだったとかという指摘をしてくるのですが、でも、やはりそういうのは大事なことではないのかなと私は思います。

町長 例えば授業の時でも、時間がないと言われれば確かにそのとおりだなと思いつつ、例えば子供たちがその時間に集中したり、先生の言うことにちゃんと意識を向けたり、例えばお笑いだったら笑いをとることだと思うのですが、これが音楽だったら、また別なところに、聞かせるとか、胸に刺さるというんでしようか。私は政治という中で生きてきて、そうなると演説でも何でもなのですが、いかに、ここで理解させるのに、まずここにどうやったら刺せるかということをいつも考えながらやるんですね。それがうまくいった、いかなかつたとかという反省とかいろいろなものがあるのですが、それで時間がないとしたら周りから言ってもらうしかないですよね。

ただ、周りから言われたとしても、最終的にそこに気付けるかどうかというのは自分でしかないので、その内省というのか、客観的に見てここはこうなんだなというところをちゃんと捉えていく。場合によっては演技の部分も含めて展開していかないと。現場ですよ。馬鹿正直さだけではなくて、そういうところもないと、やはり子供たちからの信頼というと変ですが、少なくとも集中を引き出すというのかな、やはり難しい。

	というか、それをやりやすくしていくのは、自分自身をちゃんと客観視しながらどこを直していくというか、うまく技術として、それも、やはりやっていくと、そこが結構大事だなと思うんですね。周りから厳しいことでもバシバシ言ってもらった方が絶対本人のためにはいいのだろうと思いますね。
教育長	今だと、言いすぎるとつぶれる人の方も多い世の中に（「そうなんですね。それにパワハラになってしまうから、なかなか指導者側も、パワハラだとなると大変なんですね」の声あり）現場では難しさもあるんですよね。
町長	割と女川の先生たちは、意外とそういう弱さ、メンタルがちょっと心配な先生もいるかもしれないですが、ただ、一生懸命聞くし、確かにそうだよなと。確かに客観的に授業を見ているというふうな目はあまり持っていないかもしれないですね。メタ認知、何と言えばいいのか、そういう部分というのは感じつつもあるのですが、ただ、客観的に言ってもらうというか、自分を見てみるというのは、そういうのはすごくいい視点だなというふうに、町長が言ったように。
教育長	メタ認知みたいな、だから、そういう部分の意識がどこかにあると、やりながら結構うまく修正というか、自然になっていけるのですが、そこがないと、やばい、どうしようで止まってしまうことも十分あり得るし。
町長	真面目なんですね。
教育長	真面目だけだと、ご本人辛かったりするから。
中村委員	昔よくありましたよね。指導主事訪問とかでもあって、分科会で泣くとか。
教育長	今、指導主事訪問もすごく褒めてはくださるけど、本当に具体的な指摘をもう少し強く言ってもいいのかなとは思います。褒めるということが、一つ叱って九褒めるみたいな話になってきていますからね。褒められることは覚えているのですが、叱られることはあまり苦手というか、我々の頃は叱られるの方が覚えているかな。
町長	その中で1回褒められるから、それが励みになって覚えると（「そうなんですね」の声あり）
教育長	町長、現役の教員もいるので、そのあたりを。二人いるんですが、振っていただきたいですか
町長	どうでしょう、お二人、何か聞いていてどういうふうにお感じか。
田中指導主事	先生方の教科指導力というところでは、私も今実際に指導に行

きますので、初任の先生方にこういうふうにお話しました。4人の先生です。忙しさもあるので、あなたたちが求める時に私は行きますと。私は、指導力ですか知識だったり、自分から求められる時に初めて力になっていくかな、血肉になっていくかなというのもあったので、それをお話しました。

一人の小学校の先生がすぐに、授業実践するので来てください。まず一人の先生の取り組みから始まりました。それで今、4人のうち二人の先生が、私に、明日授業するので来てください、実は今やっているのですが、声をかけてくれるようになりました。

その時私は、坂本教育指導員と違うアプローチで、必ず対面で事後指導するようにしています。その時に、こういうふうにした方がいいというアドバイスと、先生から求める質問に答えるような形での指導を今しています。

ただ、見ていると、やはり今も話題に出たように、一生懸命さはあるのですが、技術であったりといったところはまだまだ未熟だなということは感じています。

昨年度、研究授業で私が言ったのが、自分の授業を文字起こしてみてください。私もしたことがあるのですが、手ごたえのある授業は分かりやすいんです。子供の発言と教員の発言を色別にした時に、はっきりと色別になっています。そうではない授業は混在しました。ということをお話したんですが、やはりなかなかそこまでチャレンジする、自分から求めるというところまでいっていないところを、どう意識を高めていけばいいかなというところが自分でも感じているところです。

すみません。長くなりましたが、以上です。

吉田社会教育主事

昨年度まで女川中学校で体育を教えていました。

指導主事訪問とかの話にもあったのですが、年齢だけ重ねると、指導してくださる人の言葉も結局そのまま、あまり怒られないというか、ここはもうちょっとこうじゃないのかなというような指摘をいただくことは本当に少なくなっているのは感じます。もっといろいろ言ってもらっていいんじゃないかなと思いながらも、気を使われてしまうようなところがあるので、実際どの部分が良くて、どこの部分がダメでというところは、自分の中でも振り返りはしつつも、しっかり客観視できているかと言われると、そうではない時も非常に多いことは確かなんです。だから体育をやっていて、必ずTT体制でやらせていただいていたのが救いで、こここのところはこうだったけど、本当はもっ

とこうしてもらえばと思うのだけど、どうだったみたいな話をしながら次の授業の準備をしたりということもあるので、確かに指導する方も、技術的には分かっているしというか、頑張っていますねくらいの感じになってしまふところもあるので、確かにそういう言葉が欲しいのかなとも思いつつ、その指導主事の先生が実際に体育じゃないとなかなか、その教科専門でやっていないと、どこの部分をどう言っていいか分からないというところも今までたくさんあったので、東部教育事務所にしても宮城県教育委員会にしてもですが、指導主事の先生方もいろいろ勉強されて臨むのは本当に大変だなと思いながら話を聞けたりとか、そういういた現場のことも言われたみたいな話はあります。うまくなりたいとか指導の技術を上げたいという気持ちはどの先生も持っていることなので、指導主事訪問をやつたけど、結局さらっと、バーッという言葉だけで終わってしまうとなると、やった意味があったのかどうかというところになってしまって終わってしまうと、私自身は思っています。

町長

ありがとうございました。

貴重な現場の、現職の二人のご意見でございました。

もう一つ議事があるのでこの辺にとは思いますが、いろいろな考え方は、手法もいっぱいあるし、ただ現場の先生方から今お話あったようにやはり、うまくというか、向上したいというのは誰もが思っているんですよね。あとはそれに合う手法ったり、アプローチだったりみたいなものが、それも誰かが見てくれたり、自分自身ももちろん考えなければならないのでしょうかけど、一人一人が。そういうところを学校側でもぜひ頑張って、今回、研修もいっぱい本当にこれだけ用意していただいているということで、頑張っていただければと思います。

それでは、「本年度の取組の重点について」は、以上でよろしいですか。

(「はい」の声あり)

町長

では、暫時休憩いたします。

(休憩)

町長

では、再開いたします。

まず、教育長が離席ということで退社されましたので、当初予定とは若干変更しつつ、これに対して討議的な部分というよりは、資料に基づいて事務局から今日予定だった部分をご説明いただいて、考え方はそれぞれ出し合ってもらうくらいのところで今日は収めていければと思思いますので、よろしくお願ひしま

教育局長

す。

では、事務局からどうぞ。

それでは、お配りしております9ページからご覧いただきます。

「休日の部活動の地域移行について」ということで、現状と課題、それから平塚教育長のお考えを書かれた資料となっております。こちらを読ませていただきたいと思います。

まず、①番の「運動部活動の地域移行に関する検討会議」提言からということで、参考資料は6、7、8になります。

「少子化の中でも将来にわたり子供たちがスポーツに継続して親しむことのできる機会を確保するとともに、学校の働き方改革の推進、教育の質の向上も目指す。」とあります。

「令和5年度から令和7年度までの3年間を目途に、公立中学校の休日の運動部活動を段階的に地域に移行する。」とあります。

## ②現状と課題。

本丸である文科省、県教委からの通知等が届いておらず、県教委に確認しても、現在検討中との回答です。各市町教育長会議においても、度々話題になってはいますが、受け止め方が市町によって様々であり、統一した方向性を見出せていません。その中で、本取組についての研究指定を受けて事業を展開してきた白石市や地域移行に積極的な塩釜市、気仙沼市が若干、動き始めているという印象ですが、県全体としては、今後の動向を見守っているという現状にあります。

本町においても、10年、20年後の女川中学校の部活動について考えるいい機会と捉えながら地域移行を考えていく必要はあります。今後、少子化の波が進み、どの部を残し存続させていくか、生徒や保護者、町民の意識を探ることはもちろんながら、町の既存施設や外部指導者確保等の視点も加えつつ、ある程度教育委員会主導で進めていく部分もあってよいのではないかと考えています。

私見ながら、現存する部活動を、そのまま休日の部活動へとつなげていくという考えは持ってはいません。上記記載のとおり、部活動の抜本的な改革を含め、長期的なスパンで考えていく必要があると思っています。具体には、女川中学校と言えば〇〇部だと、県や全国に誇れるような部活動になればという願いを強く持っています。これまでの女川中学校の部活動における歴史やO B、O Gをはじめとした町民の意識を慮り、野球、サッカー、ソフトボール、バスケットボール等の団体種目をぜひ存

続させたいと考えます。

主体は、生徒たちなのだということを肝に銘じ、今後の対応について考えていく必要があると考えます。平日は、これまでどおり学校で顧問の指導を受け、休日は、指定された場所で外部コーチの指導を受けることになります。指導の在り方や、生徒や保護者からの信頼度の差によって、様々な問題が生まれてきたことも事実であり、間に挟まれ、嫌な思いをしてきたのは、常に生徒たちであります。その意味においても、顧問と外部指導者が連絡を取り合いながら、指導の方向性等についても共有していく必要があると思っています。

③今後の方向性について。

生徒や保護者をはじめ、教員や関係者の思いや願いを把握するとともに、町に存在するスポーツ施設との関連や指導者の確保を勘案しながら、存続していく部活動を総合的な見地から判断していきたいと考えます。

指導者の確保については、女川町スポーツ協会や女川スポーツ少年団関係者等からの情報を基に、地域の人材を整理してみたいと思います。その上で、「女川の教育を考える会」等で審議を経て、方向性を固めていければと考えています。

以上、教育長の作成した資料でございます。

資料の説明はよろしいですか。資料6、7、8ということで。こちらについては、スポーツ庁でそろえております資料でございます。こちらのご説明は、割愛させていただきます。

教育委員の皆様は、以前に何かの形で共有済みということでいいですか。

教育委員会の中では、こちらの資料の具体はお見せしていないような形でありましたけれども。

では、若干、私からやるのも変ですが、6、7、8ということで資料が付いております。

まず、考え方です。この運動部活動の地域移行に関する検討会議提言の概要と書いてあります。

運動部だけではなくて、文化部もですが、実際のところは。考え方とスケジュールというのでしょうか、こういう形で進めていけたらというのが、資料6ですね。具体的な手法だとか課題に対しての対応ということで資料7、8と両方続いているということです。

あとでご覧いただければと思いますが、一つの教員の方の働き方改革とか、負担減ということですね。その辺がまず一つ大き

くあるのと同時に、少子化も含めて、そういうふうな活動を単体では維持しにくくなっている部分もあるということが背景には当然あると。

この一つの提言の在り方として出ているのが、恐らくですが、考え方としてあるのは、運動というよりはスポーツというか、生涯スポーツ的な観点というのでしょうか、言い方をもうちょっとするとヨーロッパ型みたいな、理想形みたいなところというのはあります、今の現実と対比すると、これはできるところとできないところが当然あるよねというものと、一方での競技志向のところとは全く多分分離してしまって、単体でこういう活動、地域も含めて維持できる、あるいはもっと促進できるところが、どちら側に振れるかは分かりませんが、生涯スポーツ志向なのか、競技志向になるのか分かりませんが、競技志向のところとは著しく差が出て、結果としてそこが突出する形で、いろいろな場面、チャンスも奪うことにもなりかねないのではないかみたいな考え方も当然懸念点ではあるということで、ではそれをどういうふうに具体的に進めるかというのが、考え方と課題と対応みたいなことが出ていますが、現状としては、方向性とスケジュールと理念だけは華々しく挙げられたのだけれども、具体的な進め方については、県も基礎自治体もよく分かっていませんという今現状です。

ですので、ここでご意見というのは、どういうふうに考えていいたらいいのだろう程度の、具体論というよりは、もうちょっと大きいところでの包括的なご意見みたいなことになってくるかなというふうに思います。

自分自身ちょっと驚いたんですが、石巻かほくか、石巻日日新聞だったか、仙台育英学園高等学校と石巻地区のラグビーの結果、96 対 0 という非常に残念な結果に、残念というか、しょうがないだろうなという結果が載っていたのですが、学校が、高校ですよ。ラグビー 1 チームのところに、石巻高等学校、仙台第二高等学校、多賀城高等学校、宮城水産高等学校、気仙沼向洋高等学校、古川工業高等学校、あと石巻工業高等学校、7 校合同チームなんですよね。でも、春の大会を見ると 3 校ずつの合同なのかな。石巻工業高等学校は単体で出ているのか。ベストメンバーを組むために 7 校になったのかもしれません、いずれ春の大会は、やはり高校でも 3 校ずつでないと 1 チーム組めないと。ではもっと頑張ろうとなると、7 校組まなければならない。各校から 2 人ずつ出ても、ラグビーまだできませんから

ね。もう1人必要ですから。というぐらい、高校でもこれぐらい、ラグビーはスタメン15人必要という特殊といえば人数的には特殊なのですが、高校ですらそのようになっている。

これが別学だったら、別にノスタルジーを語るわけではないのですが、またもうちょっと違ったでしようけれども。一律共学化の影響ということもどこかに間接的にはあるのかなとは思います、いずれ高校ですらそうで、では地域にといった時に、ではどういうふうにできるのか、我々この女川だったらということですね。

基本的には、前向きな意味合いで考えていかなければいけない。どういうふうにやるにしても、前向きな意味を込めなければいけないはずですし。多分その前向きな意味というのは、それぞれ取り方が別々で、それぞれ各人各様だとも思うのです。

これについては、今のところ結論がどうだとか、具体的にフレームワークも決まっていない中で、個別にこうだということはもちろんできないところではあるのですが、まずこの地域移行というところと、まずは土・日、休日のということが冠では付くのですが、まさか土・日だけというわけには本当にいきませんから、それは平日というのでしょうか、通常に学校に通う日も含めた総括的なものにならざるを得ないわけですが、いわゆる地域移行という部分について、ご意見なり考え方というものがありましたら、今日はご意見出していただくまでということにさせていただければと思いますので、もしありましたらぜひお聞かせいただきたいと思います。

新福委員

まず、地域移行ということですが、この地域が一体どこの範囲を指しているのかというのがよく分からないというのがあって、地方公共団体における推進とかも書いていますが、女川だけでやるのか、あるいは石巻も含めてやるのかという、そのところを具体的に書いていないというところは、各地方団体に任せているのかなというふうに思ったりますが、やはり女川だけでやるには、今後の少子化を考えると非常に厳しい状況があるかなと私は思っております。

ですので、石巻地区でこういう総合的なクラブみたいなものをつくる、そこから土・日に女川の方まで指導者を派遣してもらう。あるいは、ここから石巻でもいいですし、女川でもいいですが、石巻地区と一緒にやっている人たちがやって来て、一緒に交流しながら、試合しながら競技力を高めていくとか、そういうことは考えられるかなという気がするんですよね。

うちの学生もいますし、土・日だったら大学生のアルバイトみたいなことで、この前、授業の中でも学生にやる気あるかと聞いたのですが、やりたいという教職志望の子たちはいるんですよね、土・日は。そういうのをうまく活用すれば、できないことはないかなというふうに思うのですが、女川は、でも遠いので、車がないのでといううちの学生が結構いたりするので、できないのですが、例えば土・日に石巻専修大学のグラウンドで石巻市内の陸上部が集まって合同で朝練習会をやっているんです。多分顧問がついているとは思うのですが、保護者も一緒にについて、一緒にやって、2～3時間したら解散する。そういうのをうまく、指導者がいなくて、そのクラブから管理者みたいな感じでやってきて、競技の専門の人が入れば、できることはないかなと思ったりもするんです。

ラグビーもグラウンドでやっていた時があるんですが、7～8年くらい前ですかね。土・日にやっていたんです。高校生も中学生もいたような気がするのですが、今はもう全くなくなってしまって、それを合同でやっていたような気がするのですが、その感じで地域をどう捉えていくかというところを考えると、やはり石巻地区という感じで進めた方が私は現実的かなと思います。

以上です。

町長

ありがとうございました。

広域になるとなお、部活動自体は多分形としてはあって、まずはその土・日、休日からという部分なんでしょうけど、学校側としてはどう接続していくかですよね。範囲が広くなればなるほど。というのが課題にはなってくるだろうけど、現実的なサイズ感として器、受ける器をどうつくるかというと、やはり広域というのが一つのサイズではありますよね、もちろん。

本町でも、例えばジュニア総合スポーツクラブ的なものは考えないのか。これは以前から議論というのがあって、もちろんそこは考えるし目指すのですが、ここまで受け皿になり得るかどうかというのはまた別の話かなということと、女川は指定管理がスタートしてからかなというところが基本的なステップとしては考え方がありまして、どうしても女川の場合は、そうするとサッカーか野球かみたいな片寄った方にしか、あとバスケットボールですか。それこそ受け皿として、指導者層も含め、受け皿になり得るのはその辺かななどと思いつつ、では単体で今度いけるかとかということはまたいろいろ考えなければ。そ

うすると広域という選択は当然考えていかなければいけないということですよね。ありがとうございます。

今思ったのですが、ちなみに学生さんたちあまり車を持っていないんですね。自転車で通っているのかな。

7～8割は持っているとは思うのですが、持っていない子も結構いますよね。

そうなんですね。石巻近郊のバスか自転車通学が多いのかな。すみません、余計な別なことで。

中村委員、よろしいですか。

この提言そのものがすごく曖昧で、地域とか学校に丸投げしているような気がしてならないのですが、最終的には部活動というものの形が変わっていくのだろうなというふうには思います。もう地域に移行していくわけですから。学校での部活動が地域でのスポーツ競技みたいになっていくのかなというふうには思うのですが、そうなると、今お話に出ていたように、広域の方で考えていく必要はあると思います。

まずは、今の時点でどう考えていくかというところだと思うのですが、これは学校の部活動とどう接続させていくかというのがすごく大事なところで、現実的には、休日のというのがまず出ていますから、今行われている平日の部活動を、それを基盤として、では休日にどういうふうな部活動の在り方を形づくっていくかということが問題だと思います。

そうなると指導者、つまりは学校の先生方の負担軽減というのが大きな柱でもあるので、結局その先生方の指導を少なくして、地域の方の指導の部分を大きくするということになると思います。

そうなると、その指導者が誰になるとかとか、あと一番大きな問題は、学校の先生が、まずその指導者に土・日お願いするような形になっていくと、その責任問題も出てきます。

石巻では、新聞にも出ていましたが、徐々に任用という形で責任をその指導者の方に持たせていくような形にしていくというような記事でもありましたが、最終的にはそういう形を取らざるを得なくなると思います。

だから、先生方が、今の時点だと土・日に顧問を据え置く形で、責任は学校側で持ちつつ、指導面で外部の指導者から協力をいただいていくというもの。徐々に任用することによって、その責任の部分も外部の指導者に移行していくというのが、過渡期の考え方だと思うのですが、そこがうまくいくのかなという気

もします。

やはり学校教育で行う部活動と、スポ少的な部分ではまた違いますので、その辺をうまく連携させていかないと、必ず問題が起きてくると。安全面に関してもそうですし、指導の方針を巡っての課題も出てくると思うので、指導者の確保から始まって、その指導者との指導の在り方のすり合わせとともに出てくるし、どのような形で最終的には指導者を任用しての責任移行というか、その辺のところもこれから検討していかなければならぬのかなと思います。

ただし問題は、子供たちが何をしたいのかと。土・日、学校での部活動は別にしても、土・日に別な組織の中に入つて何をしたいかという時に、全員が全員その箱に合うものに行けるのだろうかという気もします。また費用的な面も考えなければならないだろうし。助成という話も出ていますが、その辺どういうふうにして移行していくのか。余程すり合わせをうまくしていかないといけないかなというふうには感じています。

町長 土・日、休日ということで、考え方によっては、月曜日から金曜日までがっちり部活動をやって、土・日休みでもいいかという考え方も、一方でないわけではないと思うのですが、いろいろ競技力というか、チーム力というのか、個人でもチームでも何でもいいのですが、高まれば高まるほど多分土・日は試合が多いと思うんですよね。特にスポーツなどは。月曜日から金曜日にぎっちり教えて、土・日にその外部の、任用してでもボランティアでも何でもいいのですが、外部の先生、では監督お願いしますというわけにはいかないですよね。どうしても試合があったら行かなければならないですよね、先生方。

接続と言っても、そんなことも大変ですよね。難しさ出ますよね。今、聞きながら思いました。

横井委員 この間、教育長と古川の方で、このことを中心とした県北の教育委員会の教育長と代理の方が出席してくださいということで行ってきたのですが、正直、何時間かいた中で、ここに書いてあるような本当のフレームだけの説明で、あと各市町村の考え方を、今聞いてどうですかということをぐるっと振られて、順次に。当然市町村は県に言う、県はそのまた上の文部科学省の話がちゃんと来ないので何ともと。これの繰り返しをしていくと、ではいつ決まるんですかと。もう少し具体的な何かが下りてきて、それで提示されるのかなと思っていたのですが、こういう話に対してどういう初期反応をするのかなというのを見た

かったのかなと。

当然のよう何校かもう、いつでもこういう試験的なことをやっていますよというところはあります、基本的には町のもちろん単位もあるので、反応も当然3分の1くらいありました。実際、資料の7にもありますように、必要な予算とか何とか当然いろいろな裏付けがないと、仮に外部に頼む時に、責任問題なり、その手当てなり、いろいろなところをどれくらいのことを考えていかなければならないんですかというのも、文科省からはまだ何ともと。じゃあこれで何を今からみんなで話をしたいんですかと思うくらい。先程から言っているように、どうもぎっくり、平日は先生が部活動として頑張ってみます、ただ働き方改革と言われるところの土・日、80時間を超えるような大きなものがその休日の出勤になってしまって、そちらを民間にお願いしたいという、そこだけで持ってきてているというか。そうなってくると、では子供の立場からすれば、部活動の先生を絶えず見ているけど、肝心の先程言った試合とか本格的な練習の時には全く違う人が違う考え方を出す可能性もあるので、その辺のすり合わせも含めて、各町が小さければ小さいほど人材が果たしてそろうのか。それが継続的に雇用というか、お願いする形を見込めるのかというのも、なかなか何とも。ただ一通りまず意見を聞いてみますというだけだったので、その日はそれで終わったような感じだったのですが。

本当に具体的に来年度から早ければ動き出しますという割には、もう少し正直もっと詰められる要素があっての話をしないと、途中からこうだってよとなつて、急に足元すぐわれるような、なかなか難しい問題だなとは思っています。

ただ、1点、行き帰りの中で教育長と話をしていて思ったのは、どうしても人数が少ないと、バドミントンみたいな男女一緒にやれるものが一番いいとなります。多分教育長も私の世代もそうですが、いろいろ人に揉まれながら育つてほしいなというところもあるので、小さい町だからと、ササッとやれる部活動だけに集約するのもそれはそれでどうかというお考えがあるので、それはとてもいいことだなと言ったら変ですが、そういう考え方もあるな。小さいから2人、3人でやれるものだけでというのでなくとも、実際ただ大きくみんなでやろうとすると、先程も出ていましたが、では野球か、サッカーか、バスケットボールかみたいに集約されるのですが、そこにたどり着くまではある程度、子供なり、親御さんなり、指導者なり

のいろいろな形の話し合いを経て、しっかりたどり着ければ、それはそれで有りだなという気はしていました。その時の会話で。

町長

ありがとうございました。

ほかの地区でも結構戸惑いはあるんですね。今お話をあつたとおり、やはりあるんだろうなと思いますね。

働き方改革云々もちろんそうだし、今求められるものもすごく増えて、私たちが知っているような昔のイメージなんていふものではないくらい業務量増えているのは分かるのですが、ただ、そこはもう一つ、待遇の問題もあると思うんですよね。こんなに頑張っているのだから、これだけもらえればまだ頑張れるということなのか、いやそうではなくて、人としての働き方として、今の社会、今日日の社会の中で、これはもうだめだよねというところもないわけではなかったりする。

一方で対価の話もあるわけじゃないですか。部活動 2,000 円でしたか、一日手当（「3,000 円くらいですね」の声あり）3,000 円くらいですか。

吉田社会教育主事

一応ガイドラインでは、休日は 3 時間程度と言われておりますが、練習試合となつたら、3 時間程分しか出ないということです。

町長

ですから、先程の話で任用の件が、追加で任用できて、ここにリフィードして、その任用を受けたら、土・日、ただし休みの補償はない、任用は任用分として働きなさいという話なんだけど、それで多分 15 万円くらい出ると言つたら、やりますという人はいっぱい出ますよね。だって好きなんだもの、もともと。それをやっているのは、実は自分にとってはすごくヒーリングなんだという人だっているわけですよね、中には。業務ではなくて、自分のライフワークなのでという人は当然いらっしゃるわけで、そうなるとまた話は変わってくるのかな。

だから、いろいろなアプローチがあつていいのかなとは思うんですけど。これは個人の考えです。

あと、今お話をあつたことで、多分教育長がいたら最後に同じ話されていたのですが、私も、男女で言つたら 50 人 50 人いる中で、そうすると団体競技、吹奏楽部を残して、個人の部活動をもちろん残したうえでも、団体競技二つずつあれば本来できるんですね、単独でも。第 1 学年から第 3 学年まで全部合わせてです、もちろん。50 人ずつくらいいるのだから、野球とバスケットボールくらいだったら、まず確実にできると、人数。

15人と10人で25人、一応ベンチに入れる人ということですね。単純な算数だけの、数だけの話ですが、それが、募集が少なくなつて途切れたら廃部にしますみたいな、これは親御さんたちも入れた話の中で決まっていく側面はあるのですが、学校としてどうしたいとかというのもうちょっとあってもよかつたのかなというところは、確かに私自身も思ったわけですね。これはこちらがあまり口出しする話ではないなと思いながらだったのですが、もうちょっと在り方というのは、それぞれ考え方ももうちょっと横に膨らませてもいいのかなというの、私も全く同意見ではございます。

山内委員

お三方のお話されたとおりかなとは思っていまして、主役が子供なので、ここにも書いてある目指す姿として自発的な参画を通して「楽しさ」「喜び」を感じることと書いてあるので、本当に今のフレームの中で、子供たち、はいスタートとなった時に、この言葉のとおり「楽しさ」や「喜び」を感じるのかなというのを疑問だなと思います。

今、与えられている材料で料理して、さあどうぞと皿に出された時にモリモリそれを食べるのかなという、全くそのイメージがないなというのが、本当にその一言に尽くるなと思うので、子供たちが本当に楽しくスポーツに向き合えるような形を大人がしっかりつくってやるというのが大事なんだろうなというのを思います。

一方で、あと、今お話をあったとおり、すごく部活動に懸けている先生、120%部活動に懸けている先生はやはりいるので、逆にモチベーションがそこで削がれるとか、あと、これから教員になろうと、例えば部活動を経験して、うちのサッカーチームの顧問の先生いいなと。この顧問の先生みたいな先生になりたいなと思って教員になろうとしている子供たちが、今後、この制度によってもしかしたら削がれていくというか、減少していく可能性も出てくるのかなと思うと、そういうところへの何かしらの方法とかはないのかなというのを思ったりはします。

町長

一律に全部そういう今の働き方の話で、これが悪いことなんだと前提から始まっている。いや、でもそれがいい人もいるんです。だからそこも否定してしまうのはよろしくないよねと。多分そういう在り方も、ある意味は許容する、望めばそういうところもOKというような、許容するような中身で本当はあってほしいとは思いますよね。

教育長が今日は外れているということで、意見出しだけで終わ

田中指導主事

りたいと思うので、せっかくですので、お二人からまた一言ずつですが、田中指導主事からお願ひします。

今話題に出た先生たち、部活動に命懸けている先生がいると。私もそういう先生に教わってきたのですが、そういう方たちのために兼職・兼業も何らかでしっかりと伝えるということも、実は私これまで部活動の地域移行のお話が出た時に出ていました。ちゃんと指導したい先生たちに道も残しつつ、かつ、これまで無理して指導に携わっていた方たちも無理しないようにするための両方の道があるというので、今後、地域移行の中で実際に部活動を指導にされている先生方が全く携われないわけではないということも話題には出ていたので、そのあたり、兼職・兼業をどのように進めていくかというのも一つの話題になっていくのかなというところは思いました。ここもこれまで感じていました。

以上です。

町長

ある意味望めば兼職・兼業というのは、もうちょっと今どきというのではないですが、世の中的な、別ないわゆる副業的な、対価がきちんと保証されるみたいなことだと、もっと頑張れるかなと。

ありがとうございます。

吉田社会教育主事

ヨーロッパ的なというふうな話も出ていましたが、そういうところまでいくと結局、部活動は必要?みたいなところになってくる。そうすると、全中と言われる全国の中学校体育大会はどうなんだ。そうすると中総体という大会そのもの、目指すところがそこで、そこで勝ちたいというところがあつて、部活動は学校の中の一つでというようなところがあるので、ただ、ヨーロッパには全中みたいなものがないですね。自分たちがやりたいクラブチームに入って、そこで頑張りたいことをやるという流れであると、中学校という枠の中だけでチームを組んで、学校の活動として部活動で大会に出てということはやっていない。文化が全然違うところで、よそのものみたいなことを取り入れていくのは、なかなか難しいところが日本にはあるのかなと思ったりして、そもそもこの組織をどうするかというところに話がいってしまうのだろうなというところで、なかなか進めることができていない状況なのだろうと思っています。

ただ、女川中学校の先生方に関しては、休日の部活動をやりたいと思っている人たちの方がことのほか多い。ただ、お母さん先生とかお子さんのいらっしゃる方にしてみると、悪いなどい

う思いをせず、土・日に自分の子のため、家庭のために何かできる時間を持てるというのもうれしいことではあるのですが、すごく複雑な心境ですという人もいるし、だからこれはすごく都会的な話がもとなのだろうなと。東京とか、関東とか、持ったくないのに持たされてというようなことが非常に多いという話で、またこういう石巻とか女川とか宮城県とかとして見ると、すごくやりたくてやっている人も結構8割方だと思うので、そうなってきた時に、うまくいく方法が本当にあるのかというところが難しいところだなと思っています。

私も土・日は結構ウエイトを占めて楽しく部活動をさせていただいていたので、どうやって支えていくかはすごく悩みどころかなと思います。

以上です。

町長

ありがとうございました。

本当に貴重なご意見、現場の、あるいは現場に近いというか、今はちょっと離れていらっしゃるような、現場を持っているか、もしこれから戻られる可能性もある中で非常に、説得力というよりも、ですよねということです。めちゃくちゃある話でした。先程来申し上げていますが、今日はご意見だけ伺うという形で、これをまとめというのか、参考に次回も、これは教育長お戻りになってから協議いただきたいと思いますが、また次回も同様の話題で、これをベースにいろいろなまた考え方、出せるものがあれば出していければというふうに思います。

どの考え方も多分間違っていないみたいなところは絶対あるのだけど、だからと言ってそれ一つだけでやると必ず不具合出ますというものを制度全体として、どう飲み込み、うまく消化しつつやっていくかなのだろうと思いますし、では本町の場合その前提を受けてどういうふうにやっていくかというところが、本町としては肝になってくるかなという気がします。

今日は、まずはご意見をいただくところでとどめて、また次回につなげていきたいと思いますので、よろしくお願ひします。では、議事二つ目は、本日はこの形で終わらせていただきまして、「(3)その他」ということで、何かしら皆様から話題提供等ございましたら、いただければと思います。

特によろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

町長

なければ、事務局に戻して、その他事項ということにしたいと思います。

12 その他

教育局長

どうもありがとうございました。

では、大きな6番の「その他」、何かございませんでしょうか。

(「ありません」の声あり)

教育局長

では、以上をもちまして、令和4年度第1回女川町総合教育会議の一切を終了させていただきます。

本日は大変ありがとうございました。

13 閉 会

午前 11 時 35 分